

ふるさと研究発表会



●とき 平成22年11月17日(水)
午前9時30分～11時30分

●ところ 湖西市老人福祉センター集會室

《研究発表次第》

1. 開会あいさつ
2. 学長あいさつ
3. 発表
1班 我が郷土の偉人「豊田佐吉翁」
2班 大きく発展した新居町120年
4. 指導講評



我が郷土の偉人「豊田佐吉翁」

(二班)



佐吉翁が亡くなって今年で80年になります。

命日であります10月30日には、第47回の顕彰祭が営まれました。

私たちは、11月1日に愛知県の豊明市にある豊ヶ岡学園にお邪魔しました。

豊ヶ岡の「豊」は豊田のことでした。豊田織機時代に、この土地を提供したそうです。昭和12年に設立されました。

の繋がりがあり、どれ程具体的な形で目の当たりにすることが出来るのかに、深い興味を抱き、この分野でもつぶさに調査させていただきました。

3 研究の結果

①まず、豊田佐吉の生涯について簡単にまとめ上げました。

佐吉は慶応3年(一八六七年)2月14日父伊吉・母えいの4人兄弟の長男として、現湖西市の山口に生まれました。

佐吉はその全生涯を織物機械の発明と改良に捧げ、外国の特許13件、日本の特許84件、実用新案35件と、その数は百以上にも及び、世界の繊維産業の発展に偉大な功績を残した人物でした。昭和5年、享年63歳でその生涯を終えました。

②佐吉は、無類の親思い、特に母親への愛情が人一倍強かったと思われまます。

父親は大工で、佐吉は小学校を出てからずっと父親の仕事を手伝っていました。母親は、当時どの家庭でも同じでしたが、朝早くから夜遅く迄「チャンカラ、チャンカラ」と機を織っていました。「母をもっと楽にさせてあげたい」その一心でした。

ある時、新所小学校の増築工事に父と一緒にいき、そこで東京



豊田佐吉の生家

1 はじめに

私たちの郷土には「日本一」と言われるものが数多くあります。農業では「こでまり」の生産であり、漁業では鰻養殖発祥の地であり、シラスウナギやシラス漁の漁獲高も全国有数の一帯です。観光・文化財分野でも現存唯一の「新居閑跡」や郷土芸能では勇壮無比な「遠州新居の手筒花火」が挙げられます。

工業部門では、今はやりのハイブリット車の電池生産が日本一でもあります。その自動車生産では世界ナンバーワンの「トヨタ自動車」の始祖であり、「世界の織機王」と呼ばれた「豊田佐吉翁」の生誕の地であることも忘れることはできません。

そこで、私たちは新湖西市となった契機に、この偉大な「豊田佐吉翁」の業績や人柄、逸話等について詳細に調べ、今後新市からも豊田佐吉翁に続く優秀な人材の輩出を願って、敢えてこのテーマに決めました。

2 研究の方法

私たちは豊田佐吉の生家、湖西市山口にある「豊田佐吉記念館」への訪問、佐吉の菩提寺である吉美妙立寺や、鷲津小学校、鷲津中学校へも行きました。湖西市史の読破から、名古屋市にあるトヨタテクノミュージアム「産業技術記念館」の見学等、グループ別に担当して調べ上げることにしました。

一般的に、佐吉の伝記はある程度、誰でも知っていることと思います。そこで私たちは特に、現在迄も、この豊田佐吉と地元と

から来たばかりの佐田先生に出会い「西国立志編」という翻訳物の本を借りました。その本は西洋の発明ばかりの話で、イギリスのハーグリーブという貧しい大工で織物工が、糸を紡ぐ機械を発明しました。イギリスの大工に出来て日本の大工に出来ない筈はないと、観音堂で若い者が集まり勉強会を始めました。

佐吉の研究に対して父の伊吉は常に反対でしたが、母を楽にさせようとの佐吉の気持ちが強く、東京へ行こうと決心をし、地元の成功者である横須賀の、佐原谷蔵さんを頼って出掛けました。その時、母が持たせてくれたお金が13円、当時は大変な額でした。母が苦勞して貯めたお金に佐吉は胸を打たれました。

佐吉23歳(明治23年)の4月に東京上野の全国大博覧会で機械を見て「あれは全部外国製の物ばかりではないか、俺はこれらに追いつき追い抜きたいのだ」と決意しました。

そして、その年の11月に「豊田式木製人力織機」を発明しました。従来より簡単で、誰でも使うことが出来たものでした。

しかし、佐吉はこの程度では満足せず、更に改良を加え、大正



観音堂



豊田式木製人力織機

3年、ついに「G型自動織機」を完成させました。この快挙には、世界ナンバーワンの英国繊維機械企業「ブラッド・ブラザーズ社」にも認めさせることとなり、昭和4年10万ポンド(当時の100万円)で特許権を譲渡することになりました。

ちなみに、この財源が後の自動車産業への研究投資資金となったこととなりました。

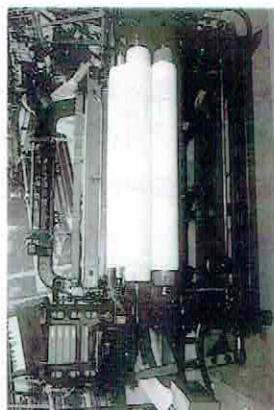
※G型自動織機は、機械を止めずに横糸の入ったシャトルを換えられる等、たくさんの自動装置が取り付けられています。

③佐吉の進取精神の格言

「障子を開けてみよ、外は広いぞ」

佐吉は大正7年、中国に繊維工場を建設しようと、現地を視察しました。しかし、当時の日中間係は芳しくなく、周囲は進出には反対一辺倒でした。そこで佐吉は、両国の親善の重要性を力説し、前述の「障子を開けてみよ、外は広いぞ」と、名言を吐き、説得したそうです。佐吉のチャレンジ精神や視野の広さを垣間見る言葉です。

鷺津小学校の校庭には「窓を開けてこらんよ」の碑があります。



G型自動織機



鷺津小学校の碑

豊田家の菩提寺である妙立寺に関して

父親の伊吉は熱心な日蓮宗の信者でした。吉美妙立寺本堂の縁板張替えに労力を寄進して無報酬で作業し、明治35年にも暴風雨で破損した時に修理を担当しました。伊吉は晩年、大正8

年に5千円を寄付しました。今もその折の寄付金目録の木札が、本堂に掲げられています。

⑤トヨタテクノミュージアム

「産業技術記念館」

この産業技術記念館は、トヨタグループ13社が共同して、トヨタグループ発祥の地である旧豊田紡織本社工場跡に残されていた建物を、貴重な産業遺産として生かしながら設立したものです。

トヨタグループは自動織機を発明した豊田佐吉とその長男、豊田喜一郎が起こ

した繊維機械と自動車の製造を基にして出来たグループであり、「研究と創造」と「モノづくり」により経済や社会の発展に尽くすこ



トヨタテクノミュージアム「産業技術記念館」



寄付金目録木札 (妙立寺蔵)

これは、小学校の創立100周年記念に、碑に刻んだ言葉で学童たちに「大志を抱くように」との願いをこめて玄関前に作られたそうです。

④佐吉の胸像は、鷺津中玄関前、鷺津小校長室、佐吉記念館前庭、妙立寺

記念碑は、鷺津小正門登り坂、豊田自動織機本社他。その他では、湖西市歌に「偉人豊田のこころ意息吹伝えてたくましく」とか、鷺津小の4年生は1年を通して佐吉に関する勉強会をしています。

更には、佐吉に続け、とばかりに「湖西青少年少女発明クラブ」の設立や、凧好きな佐吉にちなんで「こぼち凧保存会」の活動又「豊田佐吉奨学資金制度」の運用、この奨学金制度は今までに295人の方が利用されていて、基金の額は、約1億3千8百万円余りにも及んでいるそうです。そして、返済を要しない特色あるものです。このように、地元では堅実に豊田佐吉の顕彰事業が、深く根付いていることがわかりました。

特筆すべき催事は、佐吉翁の命日である10月30日を「佐吉顕彰の日」と定め、鷺津中の胸像前にて「報恩・創造」の精神を心とすべく、顕彰祭が昭和39年以降、毎年開催されていることです。



鷺津小学校にある胸像

とを目指してきました。

近年、生産活動が高度化するに伴い「モノづくり」を見る機会が少なくなってきました。そこで次代を担う若い人に、少しでも「研究と創造」と「モノづくり」の大切さやすばらしさを理解していただくよう産業技術記念館が設立されました。

私たちが皆で記念館の見学に行ってきました。説明して下さる方に、湖西から豊田佐吉翁の研究のために訪れた旨を伝えますと、本堂に親切にいろいろと教えて下さいました。また、綿とか最新の織物等を頂いてきました。とても素晴らしいミュージアムで、一日見ても飽きないほどでした。

佐吉翁の人柄がしのばれる逸話として

1 柿どろぼう

坊瀬にある妙源寺は、村の子供たちと一緒に通った寺子屋であり、絶好の遊び場でした。或る日、みんなで柿をとっている所を和尚さんに見つかり、ガキ大将を先頭にみんな逃げてしまいました。次の日の朝、寺子屋で和尚さんに重々しく、「柿に限らず他人様の物を、いくら欲しくても断りもなくとつてはいかん、どろぼうだぞ」と言われみんなうつむいて無言でいました。その時佐吉は「私とどろぼうと言ったのです」と言って皆をかばい和尚さんに心から謝ったそうです。

かばったことを知っていた和尚さんは「佐吉、今日はいいことをしたな」と言ってお頭をなでてくれました。「どろぼうは人間のくずだ。大人になってもとても立派な人にはなれないよ」と言われた和尚さんの教えに、みんな深く反省したとのこと。この頃

から佐吉は、皆のリーダー格であつたようです。

2. 岩津天神参り

やや、ひ弱に見えた佐吉少年は、お父さんとお母さんが体を心配しているのを見て明治11年の(当時11歳)春の小寒い頃に朝早く、昔から信仰の厚い神社へ48キロの道のりを一人で出かけ、目的地の岡崎に着いたときには日はもう西に傾いていました。

明るく日の朝、お参りをして「丈夫な体になれるように、そして、よりよい生き方が出来ますように」とお願いしました。

子供にとって非常に難儀な旅をよく決行したと、感心させられます。それというのも、幼児から甘えのない意志の強さがあつたと思われ、「梅檀は双葉より芳し」のことわざが思い出されます。

3. ごぼち風

佐吉翁のたご好きは有名な話で、湖西地方では昔から「やつはな、ごぼち、やつこ」「一枚だご」などがありました。特に「ごぼち風」が好きだつたようです。

翁の作った風を調べてみた結果、まず材料の竹がよく吟味されている。それは太さの均一な竹を使い、バランス



岩津天神社殿



ごぼち風

がよくとれていて無駄がなく、紙も丁寧に張つてある。おそらく一つの風を作るのにも勘に頼らず、そのつと作図をしてから制作に当たつたようです。

まさに風作りの名人であると共に、翁は風がない時でも、風を揚げたというほどの風揚げの名人でもありました。「風のないときに揚げるのが風揚げの技術である」と言われたとのこと。

(「ごぼち」とは縁川が五つ、即ち「五ぶち」の風だとされているが定説は無い)

4. 車返しの坂

名古屋から郷里の山口へ帰る時には、人力車を愛用していました。鷺津駅の近くには飯田・田中・小幡の三軒の車屋があり、中でもお気に入り飯田屋で、車夫は飯田末吉といました。

郷里山口へは鷺津学校通りを経て、古見八幡様の横の小道を経由して山口へ行くのが当時の道筋でした。山口と古見の境が当時は急な坂でした。でも翁は必ずこの坂へ来ると、丁重に車夫にお礼を言つて人力車から降り、家まで歩いて帰つたといわれます。

「家の前まで乗ることはできない。山口村は私を育ててくれた所、私の先輩や村の人達が汗水流して働いている中を、車に乗つて通つたら罰が当たる」と言つたそうです。それからというもの、古見と山口の境まで来ると車夫の飯田さんは「もう車返しの坂ですよ」と言つては、引き返したそうです。

佐吉翁は常に村に感謝し、村人たちと気さくに話したり、会食もしたといわれます。この話は「報恩・感謝」に生きた翁の人柄がしのばれます。

4. まとめ

豊田佐吉翁の遺訓を、長男でトヨタ自動車の創業者である豊一郎と親子でまとめた「豊田綱領」なるものがあり、トヨタ躍進の原点ともいえる、日頃の考え方を網羅したものです。

以下、その5か条を列記しますと、

- 一、上下一致、至誠業務に服し、産業報国の実を挙げべし
- 一、研究と創造に心を致し、常に時流に先んずべし
- 一、華美を戒め、質実剛健たるべし
- 一、温情・友愛の精神を發揮し、家庭的風を作興すべし
- 一、神仏を尊崇し、報恩感謝の生活を為すべし

表現は現代と比べれば古いですが、今や世界ナンバーワンの「トヨタ自動車」企業理念でもあり、今もつて佐吉翁の精神が生きています。

一方、生誕の地である湖西市でも、脈々と佐吉翁の顕彰、後世への伝承活動が途絶えることがない状況下にあります。

このことをとつても、如何に「豊田佐吉翁」が偉大なる人物であるか? 未来に残した思いを物語っていることではないでしょうか。

金原先生はじめ、ご指導下さつた方々、又トヨタ自動車関係の皆様、本当にありがとうございました。

そして「偉人豊田の心意気」と歌われている市歌を、皆様と一緒に歌いたいと思いますので、よろしくお願い致します。

《参考文献》

「わが郷土の偉人」(湖西市教育委員会発行)

「豊田佐吉伝」(トヨタ自動車工業発行)

写真で見ると

《ご指導下さつた方》

大学院専任講師 金原戒雄氏

湖西市教育委員会

豊田佐吉記念館

湖西市鷺津小学校

トヨタテクノミュージアム「産業技術記念館」



大きく発展した新居町一二〇年

(二班)



海と湖そして関所、自然あふれる美しい町「新居」。また、一二〇年楽しいことも厳しかったことも、町民一人ひとりの記憶は「まち」の記憶として残っています。

町制一二〇年の記念すべき年であり、湖西市との合併元年でもある本年度に大学院生となり、ふるさと新居町誕生から現在に

役場は旧関所跡に設置され、書記5、使丁3名という少数の組織でした。町長の牧野さん、この人は中町の「いざごや」さんの隣の方でした。

新居町の誕生 (2)

町の北部に位置する中之郷は新居宿組の新居、浜名、内山と合併するものと思われていました。離脱して吉津村への編入を選択しましたが、中之郷村は鷺津、古見とも隣接しています。歴史的経過をみれば新居宿組と深い関係にありながら離脱した理由が明確ではありません。

そこで私たちは中之郷のことについて調査することにしました。

中之郷村、吉津村に編入

吉津村とは、明治17年7月にできた村です。明治22年2月に静岡県令により、中之郷村が吉津村に編入されることになりました。町村制の施行により鷺津村、古見村、吉美村、山口村、坊瀬村、そして中之郷村が合併し、六ヶ村で吉津村となりました。

この吉津村の名前の由来は、吉美村の吉と、鷺津村の津から、改めて吉津村と命名されたそうです。

吉津村での存在は

吉津村と合併すれば同村内で中心的存在になれる、村は村として自治区をつくる、という気持ちが働いたのではないかと思います。中之郷在住の名士、袴田孫兵衛が吉津村の村長を明治36年4月9日から明治38年3月18日まで勤めていた時期があります。吉津村内では、重要な地位にあったことは確かです。また、東海道線普及工事により地域交流の変化を予測していたとも考えられ

たるところをテーマにしました。

新居町が大きく発展したのは

- 一、中之郷は新居町誕生時に合併せず、16年後合併しているのはなぜか
 - 二、埋め立てにより町はどのように拡大していったか
- この二点を中心に研究発表を行います。

はじめに

わが町新居町の歴史をひもとく、中之郷が16年間吉津村に編入されていたことがわかりました。

そこで私たちは「中之郷誌」の著者である二宮神社宮司渡辺先生にお話をうかがいに行きました。先生は愛知大学の教授であり、多数の本を出版されている文学博士です。

納税、教育さまざまな問題があったようです。先生のお話と、中之郷誌を元に研究をスタートしました。

新居町の誕生 (1)

明治21年4月市制、町村制が施行され、明治22年2月町村区域及び役場の位置が示されます。

新居宿、浜名村、内山村が合併しました。明治22年4月1日町が誕生し、人口六、二四九人、戸数一、一六七戸でした。新居町誕生と同時に隣海院にて初めての町会議員選挙が行われ18人の議員が誕生しました。同月末に開催された新居町議会で、初代町長を牧野甚八、助役に鈴木七次郎、収入役に原田嘉右衛門が就任し、新居町の行政がスタートしました。

ます。

いずれにしても、中之郷村の吉津村への編入には、明確な将来的展望があったわけではなかったように思われます。

吉津村編入後の問題 (1)

最も大きな問題は、新居町と中之郷村の土地問題です。相互に出入作地が多くありました。中之郷が吉津村に編入したためそれぞれに納税問題が生じました。税金を納めに管轄外にある他町村役場に行かなければならないという不便さがあり、土地の問題では、新居町民の方が深刻でした。

新居町で中之郷に土地を所有している人は一八〇人もいました。この人たちからも合併を願っていました。中之郷南部は新居町と地続きで、泉町の裏は道路を隔てて中之郷です。どこまでが新居か、中之郷かわからないくらいです。特に鉄道敷設以降の線路から南は、準新居として交流しています。このように新居町と、中之郷は切っても切れない関係です。

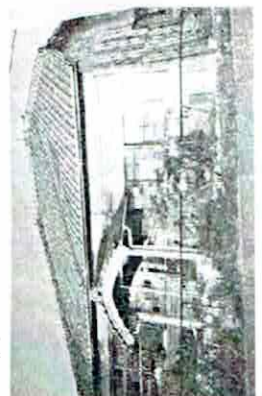
旧吉津村役場です

当時鷺津方面は開けておらず、戸長役場も川尻にあり、行政の中心は現在からみれば西寄りにありました。新居町民はこの役場まで納税に行っていたようです。

吉津村編入後の問題 (2)

もう一つの問題点は教育でした。教育問題に欠かせないのは学校の存在です。

私たちはある資料から編入前中之郷村には独立した学校があった



旧吉津村役場

ことが分かりました。

明治38年3月殿ヶ谷に「七十六番小学中之郷学校」が建てられ、その後西脇、天白へと移転し校舎は応賀寺の元塔頭であった松本坊を移築したとのこと。

その中之郷学校は、幾度か新居小学校との合併と、分離を繰り返しましたが、吉津村に編入する3年前の明治19年に町村制が施行され新居宿、浜名村、内山村、中之郷を一学区と決められ、中之郷学校は新居尋常小学校の分教場となりました。

そして明治22年中之郷の分教場学校は、吉津村へ編入により吉津尋常小学校の第二分教場として使用されました。しかし明治23年、小学校令に基づき廃校となりました。そのため明治25年4月から吉津村は中之郷区児童65名を委託金60円、授業料25円、計85円を支払い新居尋常小学校に委託することになりました。

吉津村尋常小学校

当時、吉津村には吉津尋常小学校（現在の市場）鷺津尋常小学校（小野田歯科付近）がありましたが、なぜ通学しなかったかは定かではありません。

吉津尋常小学校跡

そこで、私たちは吉津村尋常小学校の跡地を尋ねることにしました。ちょうどその日はお年寄りの集まりがあり、お話を伺うことができました。後に吉津村尋常小学校は廃校となり、建物は今も昔の外観を残し、改築され市場の公民館になっていました。学校は鷺津尋常小学校へ統合されたとのこと。中之郷の児童が鷺津尋常小学校に通学しなかったのも、距離的な問題があったの

ではないでしょうか？

中之郷の合併

明治37年新居町議会では学校修繕費の負担に関連し、中之郷に対し合併交渉を進めることを決定し6名の交渉委員を選出しました。中之郷の児童が教育委託金を支払って新居尋常小学校に通学していたため、負担してもらおうと改めて合併を持ちかけてきたのです。中之郷でも4名の交渉委員を選出して話を進めました。

明治37年10月6日浜名郡長に新居町長は合併の内申書を提出し、中之郷総代も合併願書を提出しました。明治38年3月31日静岡県知事より（中之郷の全部の土地を同郡新居町に編入）と告示され、4月1日戸数一五〇戸、人口六〇〇人が新居町に編入されました。

中之郷の合併契約書

中之郷の合併に先立つ明治37年9月30日、合併に関する契約書が交されました。教育

費の負担や現金、基本財産の権利など10項目を取り決めたものでした。

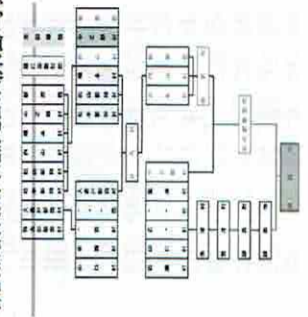
新居、浜名、内山、中之郷地区の新居町誕生

双方の嘆願により幾度となく話し合い、合併することになりました。新居、浜名、内山、中之郷地



中之郷の合併契約書

新居、浜名、内山、中之郷地区の新居町誕生



区の誕生です。

町議会については18名を20名とし、新居区より10名、残りの10名は浜名、内山、中之郷から選出されました。ここから一〇〇年を超える新居町の歩みが始まります。

新居町公有水面の埋立て

①埋立てにより町はどのように拡大して行ったか

新居町は浜名湖畔に位置し、源天山、高師山、平次ヶ谷といった丘陵に囲まれているため、土地が狭い地域で、浜名湖の公有水面埋め立てによる土地造成が必要だと考え、これまでたびたびの造成事業を行って発展してきました。

②埋立ての概要

新居町の面積は明治22年に約61㎦、明治40年には約83㎦となり、約1.4倍に増加しています。しかしこれは実質的な面積増加の表われでなく、明治22年の町村制施行に際し、吉津村に編入されていた中之郷地区が明治38年3月、新居町に合併された結果によるものです。

明治40年から大正期にかけての特徴は、大正4年の新居町駅の設置に伴う公有水面の埋立てです。これを契機として新居町の埋立て事業は盛んになり、昭和になるとこの傾向にさらに拍車がかかりました。

このように、新居町の面積が飛躍的に増大したのは大正から昭和にかけてであり、その意味においてこの時期は新居町にとって発展期であったともいえます。

③明治・大正期の埋立て

明治時代以降、一部の地域では新田開発が少しずつ行われていたようですが、市街地を形成する第一歩となったのは、旧新居関所にあった小学校東側の浜名湖埋立てであり、明治41年に一、一九〇㎡、明治44年には三、〇七四㎡の公有水面を埋立てて小学校の運動場にしました。

大正3年には中之郷釜崎地先の公有水面三三、九一七㎡余の埋立てが始まりました。この埋立地は後に大正浜と呼ばれました。昔の大正浜は海水浴場として学校水泳にも使われました。

すでに述べたように、新居町での公有水面の埋立ての契機となったのが、大正4年1月の新居町駅の設置に伴う埋立てでした。新居町駅敷地埋立てに要する土砂は天当山、源天山および大日山から採取することになりました。源天山・大日山からは一部の区域で民家の上に木造の架道橋を設置して土砂の運搬を行いました。埋立て工事には町民も労力奉仕し、作業はすべて人手によって行われ、ツルハンや鍬で切り崩し、ミノ・モッコで運



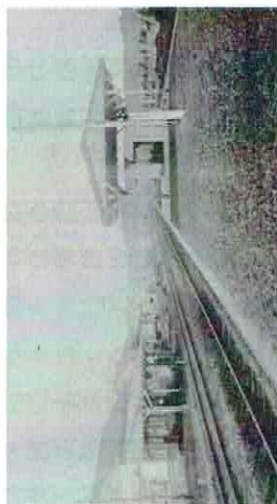
関所に設置された新居尋常小学校

新居町駅設置に伴う埋立て工事

ラッキョウと呼ばれたトロッコ

ぶというものでした。とても大がかりな工事であったと言い伝えられております。また、ラッキョウと呼ばれたトロッコに町の人々は眼を見張り、見物人も多かったとのこと。

この工事は、浜名湖上約六〇〇m沖合いの公有水面三五、六四〇mを埋立ててできた駅であり、当時「浮見堂」といわれました。これに伴い大正4年に関所跡から新居町駅に通じる間の公有水面二七、六九八mの埋立てが完成し、この埋立て地は大正4年9月に栄町と命名されました。鉄道が開通してから20年余り続いた孤島状態が終わりました。



浮見堂と呼ばれた新居町駅

駅ができると、周辺には荷物取扱所や各種問屋が進出しました。駅前の水路には幅20m程の船着き場があつて、鉄道貨物等の輸送には団平船や巡航船が活躍するようになり、しだいに浜名湖での交通の拠点となりました。

大正中頃から浜名湖を埋立て、公有水面を利用したウナギの養殖が盛んになりましたが、昭和に入ると地下水を汲み上げての養殖に変わってきました。向島もかつては養殖場でしたが、昭和25年頃より工場誘致のため本格的に埋立てが行われました。誘致により工場が進出すると共に住宅が建ち、昭和53年に向島地区として独立しました。

地先の公有水面埋立てが完成しました。

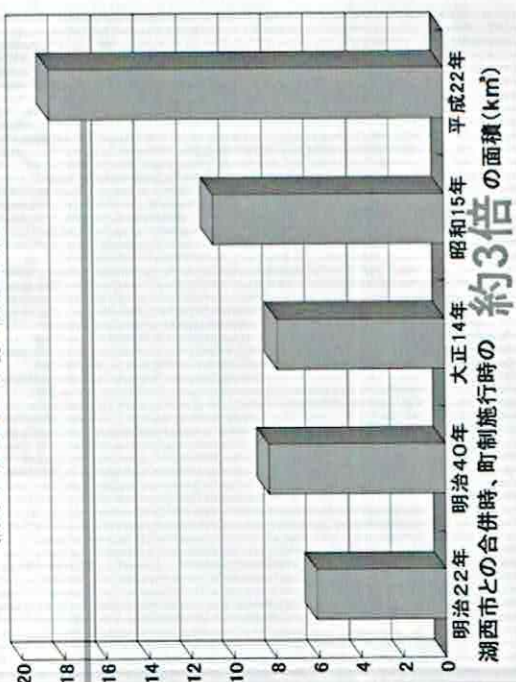
昭和42年、弁天島にあつた浜名湖競艇が、レース環境及び運輸省の移転勧告による問題解決のため、現在地を埋立てました。

大正4年から、国道1号線が西浜名橋の完成によつて開通した昭和7年までは、移り変わりの激しい時代です。

⑥ 新居町面積推移

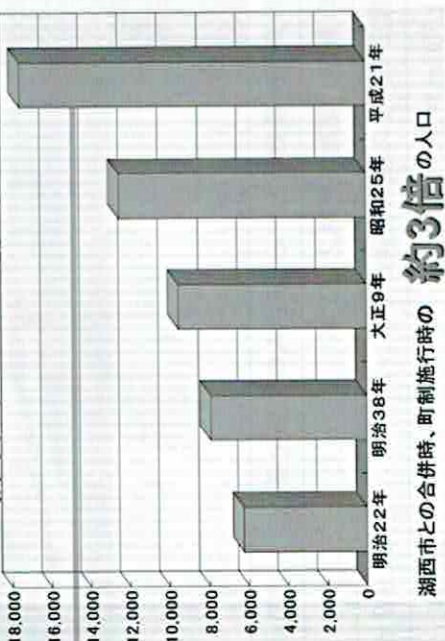
公有水面の埋立てはその後引き続き行われ、新居町の面積は明治22年六・一、大正14年八・九、昭和15年一〇・九km²で、平成

新居町の面積推移



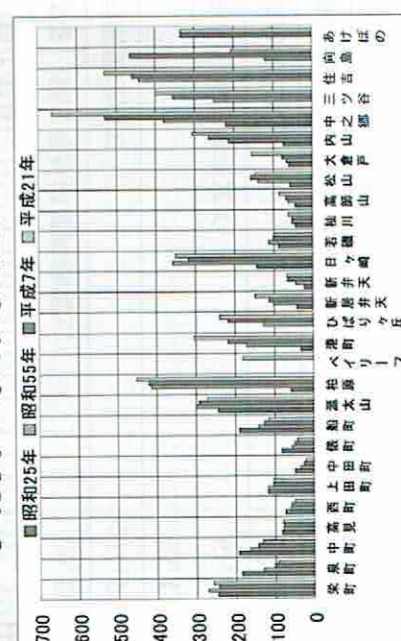
(資料1)

新居町の人口推移



(資料2)

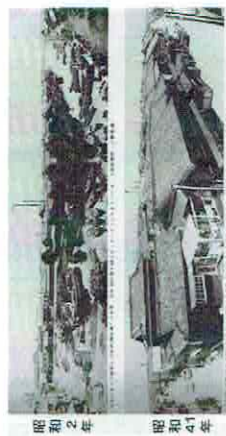
字別世帯数変動



(資料3)

④ 埋立て前後の栄町・船町全景

下の写真は昭和2年の栄町・船町の全景で左端は「宝屋」中央部分の煙突は「守田製糸」、右端道路は洲崎通りで、浜名湖の堀割になっていたことがよく分かります。下の写真はほぼ同じ位置で撮影した昭和41年の栄町・船町の街並みで、浜名湖の堀割は暗渠となり洲崎橋へ続いています。この写真は平成22年に撮影した現在の船町です。



埋立て前後の栄町・船町の全景

これでも分かるように栄町・船町は埋立てによつて発展した町ということがよく分かります。

⑤ 昭和期の埋立て

昭和3年9月から東海道線浜名湖第2・第3鉄橋間南側の公有水面埋立てが始まり、引き続き昭和7年、三五、一五五m埋立てられ、新弁天が完成しました。昭和4年には大村旅館から元日本通運前までが埋立てられ、続いて駅南一帯の埋立てが行われ、栄町にも住宅が建ち始めました。



現在の栄町・船町

昭和6年中之郷地先、大村開墾二七四、七二二m²、昭和8年9月には中之郷字寺川地先の昭和開墾六一、八〇五m²が水田等、農業用地として埋立てられました。昭和9年6月に新居弁天・向島

22年合併時、浜名湖を含め一八・六五km²となり、現在は町制施行時の約3倍の面積となりました。(資料1)

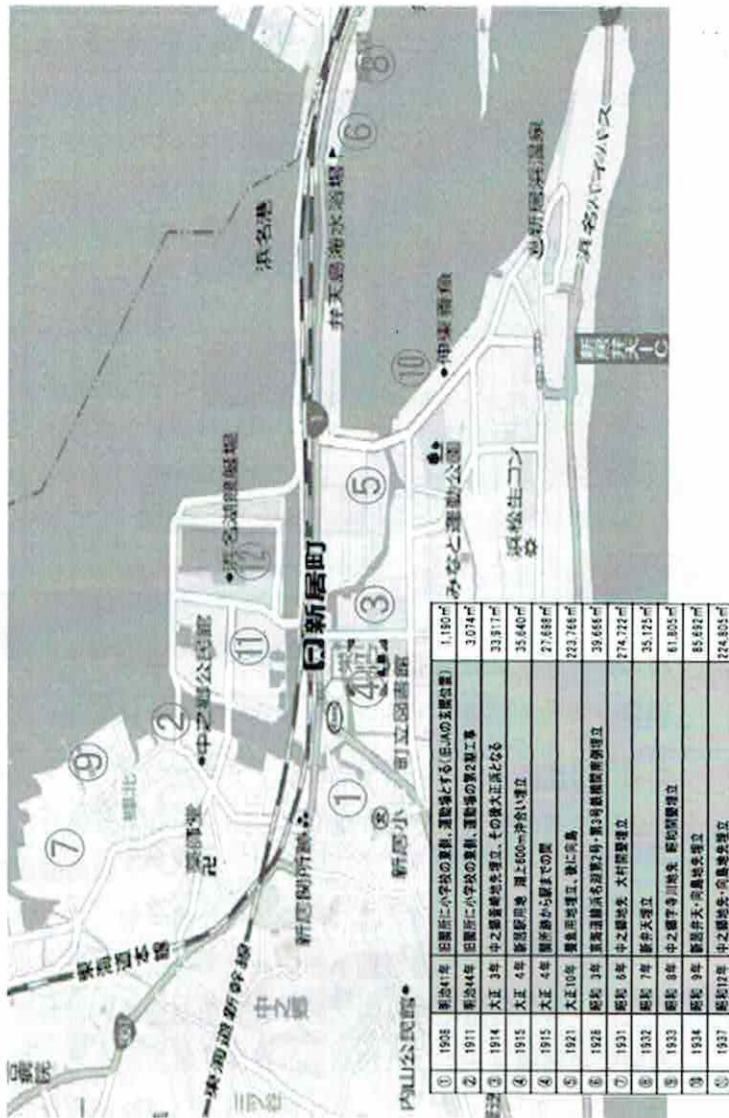
⑦ 新居町の人口推移

人口も時代と共に増加しました。一二〇年間で約3倍になりました。(資料2)

⑧ 字別世帯数変動

昭和25年最も多いのは源太山、次いで栄町、一方少ないのは新居弁天、港町でした。その後、新しく住宅地が開発され、昭和41年にひばりヶ丘、昭和53年に向島、平成5年にあけぼの、平成18年にベイリーフ等ができました。(資料3)

主な公有水面埋立図



No	西暦	年代	埋立地	埋立面積
①	1908	明治41年	旧閑所に小学校の東側、運動場とする(旧JAの玄関位置)	1,190㎡
②	1911	明治44年	旧閑所に小学校の東側、運動場の第2期工事	3,074㎡
③	1914	大正 3年	中之郷養魚池先埋立、その後大正浜となる	33,917㎡
④	1915	大正 4年	中之郷養魚池先埋立、その後大正浜となる	35,640㎡
④	1915	大正 4年	新居町駅用地 湖上600m沖合い埋立	35,640㎡
④	1915	大正 4年	閑所跡から駅までの間	27,698㎡
⑤	1921	大正10年	養魚池埋立、後に向島	223,766㎡
⑥	1928	昭和 3年	東海道線浜名湖第2号・第3号鉄橋間南側埋立	39,666㎡
⑦	1931	昭和 6年	中之郷地先 大村開墾埋立	274,722㎡
⑧	1932	昭和 7年	中之郷地先 大村開墾埋立	35,125㎡
⑧	1932	昭和 7年	新井天埋立	61,805㎡
⑨	1933	昭和 8年	中之郷字寺川地先 昭和開墾埋立	85,692㎡
⑩	1934	昭和 9年	新居弁天・向島地先埋立	224,805㎡
⑪	1937	昭和12年	中之郷地先 東海養魚埋立	90,251㎡
⑫	1967	昭和42年	浜名湖競艇場用地埋立	

総合的な効果として、新居の埋立て事業は鉄道開通に伴い、停車場の設置場所は勾配及び曲線部も無く、直線状態の条件を満たす場所として、町郊外に設置されました。

新たな市街地を造成し、人口増加を図ることでした。元来、新居という土地柄は、閑所が置かれた地形状、東は浜名湖で行き止まりの上、西は往還道沿いの家並みで「鰻の寝床」と例えられるとおり民家が密集し、余分な土地は皆無に近い状況だったからです。

新居で最も埋立が盛んであった昭和初期、新居町長となった渡辺鑑吉氏は「土地無き所に家無き、人無き事、これくらい明らかな事はない、而して人無く、家無き所に文化もある筈も無く、財源の生ずるいわれが無い」と述べていました。

浜名湖は新居をはじめ周辺でも、浜名湖埋立による事例は多くありました。浜名湖畔に住む住民にとって浜名湖は切っても切れないものでしょう。

終わりに

■ふるさと研究を通じて

グループ全員が共通テーマに向かって研究することにより、仲間同士のつながりはより深いものとなりました。

また、わが町をあらためてふりかえることにより、あいまいであったことが明確になり、新しい発見もありました。当時ご苦労された方に感謝いたします。

■今後は

美しい海と湖に囲まれ、歴史をもつ町に住めることに誇りと感謝をもち、これからも、自らが研究する機会をもつことにチャレンジし、生涯学習に努めていきたいと思ひます。

《参考資料》

- 新居町史 2・9・10巻、中之郷誌、新居ものがたり、
- 新居人の一二〇年、湖西の文化、広報あらい、わが町あらい、
- 写真で見えるあらい、国勢調査